

日々、リリー

リリーが生まれた日はいつも今日だった
感傷のバタークリームと誘惑の果実の
大きくて丸いケーキを駅の前で買っては
羊の色をした蝋燭で生まれた薄い火々に
囲まれて僕たちは優しい笑い声を出している

少しはしゃぎすぎたみたいだった
黄色いクラッカーと壊れたレコード
鳴らないけれど美しい調べは
心で覚えているからね
生れてきてくれてありがとう、リリー

少し悲しすぎたみたいだった
死んだ人を生きている人みたいに
想ってもいいような常識がほしい
神様も今は少しだけ休んでいてね
今日は僕たちの温度だけでぬくもる

リリーが死んだ日はいつも今日だった
よく座っていたソファの温度は上がりず
洗面台に長い綺麗な涙が一滴も落ちはしない
冷蔵庫も壊れないし、洗剤の量だってもう
怒らなくていい

声が出ないよ、リリー

僕はリリーの身体を抱きしめようとして
空っぽの自分の肉体を抱きしめる
だけどそこにはなにもない
よく見たことのある瞳が濡れるだけ